

## りこうなまほうの鳥

昔むかし、北のハンガイの山の中に、りこうなまほうの鳥がいました。この鳥は人間の言葉を話すことができました。これまでたくさんの中や領主や金持ちたちが、なんとかしてこの鳥を自分のものにしたいと考えました。けれども、何度も、何度家来や召使いをつかわしても、だれもつれ帰ることはできませんでした。ふしぎなことに、鳥は逃げざるわけでもなく、一万年も前から美しい葉が風にひるがえっている赤松のえだにとまって、ただ美しい歌をさえずっているだけでした。それでも、つれ帰ることはできなかつたのです。

さて、東の民たみを支配しばいしていたインテゲル王が、りこうなまほうの鳥のうわさを聞きました。そして、

「なんとふしぎな鳥だ。だれもかれもこの鳥にだまされて、つかまえられずに帰つてくるとは。わたしがみずから行つて、なんとかしてつれて帰ろう」といつて、出かけていきました。

インテゲル王は、はるばる北のハンガイまで行き、一万年も前から美しい葉が風にひるがえつている赤松の木の下にやつてきました。りこうなまほうの鳥は、逃げようともせず、おとなしく王につかりました。王は、たいへんよろこびました。

王が、けわしい道をもどつていると、りこうなまほうの鳥が話しかけてきました。

「気高い王さま。わたしをつかまえることはむずかしくありませんでした。でも、あなたの国に着くまで、つぎのふたつのことを守つてください。さもないと、私はすぐにとんで逃げます。ひとつは、わたしたちふたりのうちのひとりが、いつも歩きながら話をすること。もうひとつは、あなたが、なにがあつても悲しまないことです」

インテゲル王は、

「そうか、それならおまえが先に話をしろ」といました。すると、りこうなまほうの鳥は、

「はい、王さま。では、お聞かせします」といつて、話はじめました。

「この地方に、若い獵師わか りょうしが、年とった母親といつぴきの大といつしょにくらしていましました。ある日、獵師は、犬をつれて狩りに出かけました。すると、山のとうげ道で、銀を

いっぱいひつんだ荷車が、こわれて立ち往生おうじょうしていました。荷車の持ち主は、とほうにくれですわりこんでいました。ふたりはいさつをかわして、むかいあつてすわり、しばらくたばこをふかしていました。やがて、荷車の持ち主は、

『わたしは下の村へ行つて、車大工を呼よんでこようと思ひます。そのあいだ、この荷車を見はついてもらえませんか』といいました。猟師は、

『わかりました。そうしましょ』と答とうえました。荷車の持ち主はたいそうよろこんで、とうげをこえていきました。

荷車の持ち主は、夜になつてももどつてきませんでした。猟師は、

(こまつたな。こんなおそくなつてしまつた。母さんは目が見えないから、何も食べないで待つてゐにちがいない)と思ひました。そこで、犬に、

『わたしは家にもどつて、お母さんにごはんを食べさせてくるよ。おまえは」で、荷車の持ち主が帰つてくるまで、見はつておいで。盜賊とうやくたちになにも盗ぬすまれないようにな』といつて、家にもどりました。

犬は、主人のいいつけを守つて荷車の番をしていました。つんである銀や、荷車につながれため牛を盗まれたりしないように、荷車のまわりをぐるぐる回つて見はりました。

夜がふけたころ、やつと荷車の持ち主が、車大工を見つけてもどつてきました。すると、猟師はいなくなつていて、犬だけが忠実ちゆうじつに荷車を守つていました。荷車の持ち主は、『おまえは、ほんとうにいい犬だなあ。さあ、これがお礼だよ。持つてお帰り』といつて、犬の口に銀を一まいくわえさせてくれました。

犬は走つてかえりました。そして門のところで猟師を見つけると、くわえていた銀を猟師の足元におきました。猟師はおどろき、悲しみました。

『わたしは、あの男の荷車をよく見はるようにいつたじやないか。それなのに、おまえは、つんであつた銀を盗ぬすんでしまつたんだな』

猟師はそういうて、こん棒ぼうで犬を打ちころしてしまつたのです

りこうなまほうの鳥がここまで話したとき、インテゲル王は、

「それはいけない。そんなよい犬をまちがつてころすとは、なんといふことだ」といつて、悲しみました。すると、りこうなまほうの鳥は、

「そうです。あなたは悲しんでいらっしゃいます」といつて、あつというまにとび去つてしましました。インテゲル王は、

「いつたいどうして、悲しまないというやくそくをやぶつてしまつたんだろう」といつて、たいそう後悔こうかいしました。そして、またはるばるハンガイにもどつていきました。

インテゲル王は、一万年も前から美しい葉が風にひるがえつてている赤松の木の下に行き、りこうなまほうの鳥をつかまえました。まほうの鳥は、

「では、お話を聞かせします」といつて、話はじめました。

「むかし、この国に、ひとりの女がいて、ねこを飼かっていました。ある日、女は、いざみに水くみに出かけるときに、『ゆりかごのぼうやをよく見ていておくれ』と、ねこにいました。

ねこが、ゆりかごのそばに横になつて赤んぼうからハエを追つていると、大きなねずみがあらわれました。ねずみは、赤んぼうの耳をかじろうと、そつと近よつてきました。ねこは、おこつてねずみにとびかかりました。ところが、ねこがねずみを追いかけているすきに、もういつぴき、太つたねずみがやつてきて、赤んぼうの耳をかじりました。赤んぼうは大声をあげて泣なきました。ねこは、びつくりして引きかえしてくると、太つたねずみにとびかかつてころしてしまいました。そのとき、女が帰つてきて、赤んぼうが耳をかじられて泣いているのを見ました。女は、かんかんにおこつて、

『わたしは、ぼうやを見ていてといつたじやないの。それなのに、おまえはぼうやの耳をかじつてしまつたんだね』といつて、ねこを打ちころしてしまいました。それから、あたりを見まわして、太つたねずみが赤んぼうの耳をくわえたままころされているのを見つけました。女は、まちがつてねこをころしてしまつたといつて、わつと泣きだしたそうです』

インテゲル王はこの話を聞いて、「ああ悲しいことだ」となげきました。そのとたん、りこうなまほうの鳥はとび去つてしましました。

インテゲル王は、もういちどハンガイにもどつていきました。そして、一万年も前から美しい葉が風にひるがえつてている赤松の木から、りこうなまほうの鳥をつかまえて、けわしい道を帰つていきました。りこうなまほうの鳥は、もうひとつ話をしました。

「ある年、日照りがつづいて大地がひからび、大きなさいなんがやつてこようとしていました。この国に、アルバイという男がいて、

『もつとましな土地をさがして、平和に幸せにくらそう』といつて、旅に出ました。けれども、歩いていくうちに、あつい太陽にやかれ、口ものどもからからにかわいて、一

足も歩けなくなりました。アルバイが、高い岩の足元にすわって死ぬのを待つていると、  
ポトツ、ポトツと、水の音が聞こえました。見ると、岩の先から水が一滴いつてき、また一滴と  
したたりおちていたのです。アルバイはよろこび、小さなさかずきを取りだして、水を  
受けました。水は、さかずきにいっぱいになりました。アルバイが水を飲もうとしたと  
き、とつぜん、カラスが一羽とんできて、羽でさかずきをたたき落としました。水はせ  
んぶとび散ちつてしまいました。

アルバイは、たいへんおこりました。

『天は今、私をあわれんで水をめぐんでくれたのだ。それなのに、あの悪いカラスめは、  
この死にそうな人間をすくってくれないのだ』

アルバイはそういって、カラスに石を投げつけました。石は当たって、カラスは死んで  
落ちました。アルバイが、カラスの落ちたところへ行つてみると、岩のさけ目から、冷  
たいわき水がほとばしり出でていきました。アルバイは、はらいっぱい水を飲みました。

アルバイが、荷物を取りに引き返してきて、ふと見上げると、岩の上で大蛇だいじやがねむつ  
ていました。大蛇の口からは、つばがしだり落ちていきました。アルバイは、

『ああ、さつき水だと思つたの大蛇のつばだつたのだ。カラスは大蛇の毒どくからわたしを  
すくつてくれたのだ』といつて、カラスをころしたことを泣いて後悔したということです』

りこうなまほうの鳥がここまで話すと、インテゲル王は、

「ああ、カラスは、ほんとうにかわいそうだ。自分の親切が分からぬ人間を助けよう  
として、ころされたのだ」といいました。りこうなまほうの鳥は、

「あなたは、また悲しんでいますね」といつて、とび去りました。

インテゲル王は、

「もう、よそう。あの鳥をつれ帰るなんて、わたしにはできないことだ」といつて、そ  
のまま国へ帰つていきました。

出典　『語りの森昔話集1 おんちよろちよろ』村上郁再話

原話　『世界の民話9』 笹谷雅訳／ぎょうせい